

あいさつにかえて

前回の東京大会は世界中でコロナの影響があり、開催を1年遅らせたことから、今年は3年ぶりのオリンピック・パラリンピック開催となります。

オリンピック東京大会では、色々な種目で日本選手の活躍が光り、過去最多の58個のメダルを獲得することができ、自国開催とはいえ長きに及ぶコロナの影響から、少し盛り上がり心配されたスタートでしたが、日本人選手のメダルラッシュの大活躍に、伏し目がちだった国民の多くを励まして、盛り上げてくれた大会となりました。

今年は花の都パリでの開催です。前回大会同様、日本人選手の活躍が期待されるのですが、どれほどのメダルが獲得できるか、楽しみで仕方ありません。

さて、オリンピックでの活躍もそうですが、近年は海外で活躍する日本人選手が明らかに増えてきました。一昔前は海外移籍すら珍しかったほどなのに、今では海外の最高峰のリーグで活躍し、世界的に人気を博しているなんてこともよく耳にします。野球で言えばメジャーリーグ、サッカーで言うならヨーロッパのトップリーグ、バレーボールやテニス、アイススケート、ゴルフでも海外で成功し、名前の通っている選手は確実に増えています。つまり、それだけ日本の競技レベルが上がってきたのでしょう。

そこには、選手育成に関わる環境や指導の変化が大きな要因としてあるのではないかと考えます。施設の整備、用具の発達、大会の増加などは年々整えられていることの一つでしょう。しかしながら、選手育成のための情報やテクニク、指導や練習のメソッドに関しては、飛躍的に良いものになってきていると感じます。良い環境でよい指導を受けた子どもたちが、主体的に競技(種目・運動)を楽しむことこそが、競技力向上の絶対条件になると考えます。

我々、京都市小学校体育研究会では、特に前述後半の「主体的に運動を楽しむ」ということに力点を置いてこれまで研究を進めてきました。しかし、学校体育では競技力(技術や技能)を高めることを主眼に置いているわけではありません。またよく言われるのですが、「体力の向上」だけを目指しているわけではないのです。むしろ、「生涯にわたって運動を大切にしていこう」を育てたいと考えています。

そのためには、まず運動を楽しみ、仲間と励まし教え合い、認め合いながら、自分や自分のチームの課題を見つけて解決の方法を模索し、挑戦を続けることが大切です。既成のスポーツのルールや場をそのまま使うのではなく、その運動がもつ特性(魅力)に誰もが触れられるように、実態をもとに修正を加えます。そのようにして、単元の最初からどの子どもが今ある力で楽しみ、単元が進むにしたがって工夫した力で楽しめるようにしていきます。運動を「好き」から「大切」に思える子どもたちを、たくさん育てていければ、「生涯にわたって運動を大切にしていこう」になるのではないのでしょうか。

「運動から学ぶ」のではなく、「運動そのものを学ぶ」ことに、その運動がもっているすばらしさを余すことなく享受できると考えます。ぜひ、京都市の体育にご注目ください。

令和6年度
京都市小学校体育研究会
会長 谷垣 賢